小・中学校再編にかかる地区意見交換会（本匠会場）

１ 日時　　令和８年１０月６日（火）　１９時～２０時１５分

２ 場所　　本匠中学校体育館

３ 参加者　　３７人

４ 事務局　　都留教育長、神崎教育部長、御手洗教育総務課長、吉田学校教育課長
　　教育総務課職員　４人、学校教育課職員　２人

５ 次第

（１）開会

（２）教育長あいさつ

（３）教育部長あいさつ

（４）佐伯市立小・中学校再編（案）について
- 今回の説明会の趣旨とこれまでの経過
- 小・中学生の現状と今後の見通し
- 学校の再編に関するアンケート調査結果について
- 学校再編することのメリット・デメリット
- 適正な学校規模の考え方
- 小・中学校再編（案）
- 中学校再編後の学校規模
- 小学校再編後の学校規模
- 小・中学校再編までのスケジュール案

資料を基に上記の項目等について説明

（５）質疑応答

（６）意見交換

（７）閉会

6 質疑応答・意見交換の内容

（1）質疑応答

※個人が特定されるおそれのある発言等については、個人情報保護の観点から、一部を編集・省略して掲載しています。

発言者	発言内容
参加者	再編のメリットとして「集団で行うことによる切磋琢磨」が挙げられていますが、切磋琢磨することを求めている人とそうでない人がいると思います。また、選択肢として本匠小学校へ通えるだけでなく、例えば、直川の環境が気に入っているから直川で育てたい、あるいは他の地域の環境が気に入っているからそこで育てたいという方もいらっしゃると思います。そうした点を踏まえますと、切磋琢磨することの必要性や理由がどこにあるのか疑問に感じます。切磋琢磨しなくても豊かな人間性や素晴らしい資質が育つこともあるのではないかと思いますが、なぜ切磋琢磨することがメリットとして強調されているのでしょうか。その必要性についてご説明をお願いいたします。
事務局	資料７ページに佐伯市教育委員会の学校教育指導方針を掲載しております。現在、佐伯市が目指す子ども像として「自分の考えを持ち、自分の言葉で表現できる子ども」、そして「自他を大切にし、力を合わせて活動する子ども」の２つを掲げ、施策を推進しております。子どもたちが協力しながら多様な意見や考えに触れ、仲間と出会いながら活動していくことは、将来を見据えた際に大変重要であると考えております。これから答えのない社会の中で、多様な人々と出会い協力していく力を育むためには、互いに協力し合い、多様な意見に出会いながら切磋琢磨する体験や経験が大切であるという考えに基づいております。もちろん、本匠小・中学校をはじめとする小規模校で行われている少人数指導や温かい関わりを否定するものでは決してございません。少人数ならではの良さも大切にしつつ、多様な集団の中で切磋琢磨することが、より良い学びや社会性の育成につながると考えております。
参加者	資料８ページの再編案についてお伺いいたします。私自身、学校運営協議会等を通じて、本匠地域の子どもたちがどのような形で学校を選択できるのかについては理解しておりますが、地域住民の皆様の中には本日初めて耳にする方も多いと思います。本匠地域の子どもたちについては、統合案である統

	合小・中学校Ⅲと、小規模特認校である本匠小・中学校の両方を選択できるという点について、改めて分かりやすくご説明いただけますでしょうか。
事務局	本匠地域に住んでいる子どもたちにつきましては、本案では指定校として中学校は「統合中学校Ⅲ」、小学校は「統合小学校Ⅲ」が指定されることになります。ただし、本匠地域には小規模特認校である本匠小・中学校がございますので、本匠地域の子どもたちは指定校である統合校（統合小・中学校Ⅲ）に進学することも、地元にある小規模特認校（本匠小・中学校）に進学することも、どちらも選択できる仕組みとなっております。
参加者	本匠地域に学校が残ることは大変ありがたいことだと受け止めておりますが、他地域を見た場合、上浦、米水津、鶴見、直川などでは学校が完全になくなってしまいます。冒頭に教育長から「地域に学校があることが希望であり、地域を支えてきた」というお話がございましたが、地域から完全に学校がなくなるということは、地域にとってどういう事態を招くのか危惧しております。子どもの減少により効率性を考えればやむを得ないという理屈は分かりますが、住民の心情として地域から学校が消えることは極めて大きな問題です。また、通学時間の関係で再編対象外とされている宇目地域につきましても、単独で将来にわたり維持していくことは厳しく、「宇目だけが取り残されてしまうのではないか」という懸念が生じると思います。こうした住民の心情や地域コミュニティへの影響について、教育委員会としてどのように考えているのかお聞かせください。
事務局	地域から学校がなくなることへの懸念につきましては、他地域の意見交換会でも同様に多くのご不安の声をいただいております。学校は地域の防災拠点や交流拠点としての役割も担っていることから、地域コミュニティへの影響は大変重要であると認識しております。対策といたしましては、統合後の新設校においてコミュニティ・スクールを積極的に活用し、旧校区を含む広い地域の皆様のご意見を反映できる仕組みを構築したいと考えております。また、総合的な学習の時間等において各地域の歴史や伝統行事を題材として取り上げるなど、統合後も子どもたちが生まれ育った地域への誇りと愛着を持ち続けられるよう、教育課程の編成等を通じて配慮してまいります。また、宇目地域につきましては、広大な面積を有するため、通学時間が片道１時間を超える地域があることから、現行案では対象外と位置づけております。しかしながら、先日の宇目地区での説明会におきましても「宇目だけが取り残

	されるのではないか」というご意見を直接いただいております。今回の再編案の対象外であっても、小規模校における教育環境の維持・充実策を含め、今後とも引き続き協議・検討を重ねてまいります。なお、広域で統合を行った蒲江地域（蒲江翔南学園）におきましても、コミュニティ・スクールを活用した「ふるさと里帰り学習」を実施し、かつて小学校のあった各地域へ児童生徒が出向いて住民の皆様と交流を深めるなど、統合後も地域と学校の良好な関係を継続している事例もございますので、こうした取組も参考にしていきたいと考えております。
参加者	本匠地域の子どもは本匠小・中学校を選択できるとのことですが、統合により校区が広域化した際、例えば直川地区などから「本匠小・中学校の方が近いから通いたい」という児童・生徒が出てくる可能性があります。小規模特認校の受け入れ人数は１学級 13～15 人程度が上限の目安と伺っておりますが、その上限に達しそうな、あるいは超えてしまった場合、地元である本匠地域に居住している子どもが本匠の学校に通いたいと希望した際に、除外されることなく優先して受け入れてもらえるのでしょうか。
事務局	小規模特認校の定員目安（１学級 13～15 人程度）に近づいた場合、教育委員会と学校側で協議を行います。小規模校ならではの特色ある教育活動が維持できると判断されれば、柔軟に受け入れることも可能です。ただし、受け入れ上限を超えて小規模校の特色が維持困難となった場合には、区域外からの通学希望をお断りすることはあり得ます。本匠地域に居住する子どもたちにつきましては、制度上は統合校（統合小・中学校Ⅲ）が指定校となりますが、地元の子どもたちが不利益を被ることがないよう、学校側と十分に協議を行い、適切な措置を講じてまいります。
参加者	意見交換会後の予定を教えてください。
事務局	今後の予定についてご説明いたします。今年度に市内各地区での意見交換会を終えた後、出されたご意見を整理した上で、再度「学校教育問題検討協議会」に諮り協議を行います。当初の計画では今年度中に協議会から答申をいただき、その後、パブリックコメント（意見募集）を実施する予定としておりました。しかしながら、各地区で多くのご意見や課題が出されている現状

	を踏まえ、今年度中の進行スケジュールについては柔軟に対応する必要があると考えております。基本計画案の策定後は、令和９年度より保護者説明会等を重ねて丁寧な合意形成を図り、令和 10～11 年度の準備期間を経て、令和 12 年４月に統合中学校、令和 14 年４月に統合小学校の開校を目指すスケジュールを想定しておりますが、いただいたご意見を踏まえて慎重に進めてまいります。

（２）意見交換

※個人が特定されるおそれのある発言等については、個人情報保護の観点から、一部を編集・省略して掲載しています。

発言者	**発言内容**
参加者	統合小学校Ⅰの組み合わせについてですが、東雲小学校から佐伯小学校までは距離として約 13㎞ であり、極端に遠いわけではないかもしれませんが、校区を越えて生活環境や地域性の全く異なる地域へ通うような印象を強く受けます。本匠が含まれる統合小学校Ⅲは旧郡部同士で地域的なつながりがあり比較的まとまりやすいと感じますが、統合小学校Ⅰは地域の性質の隔たりが大きく懸念されます。また、佐伯小学校は現在でも中学校進学時に２校（鶴谷中学校と佐伯城南中学校）へ分断される課題を抱えております。同級生からも、中学校進学時に親しい友人と分かれてしまう寂しさを耳にしてきました。今回の再編を機に、そうした進学時の分断問題についても配慮すべきではないでしょうか。距離や地域柄を考慮し、必ずしも佐伯小学校を統合小学校Ⅰに含める形にこだわらず、佐伯東、八幡、東雲など地域の実情に即した柔軟な組み合わせも検討していただきたいです。
参加者	アンケート結果において「約６割が肯定的（賛成＋やむを得ない）」と示されていますが、「やむを得ない」というのは「望ましくはないが仕方がない」という苦渋の思いであり、実質的には否定的なニュアンスを含んだ意見とも捉えられます。見方によっては評価が大きく変わるのではないでしょうか。また、統合される側の小規模校の住民は市全体から見れば少数であるため、こうした意見交換会でいくら声を上げても、全体としては「肯定多数で合意形成が進んだ」と処理されてしまうのではないかと危惧しております。

	教育委員会としては再編案を前進させる強い意志を持って進められている印象を受けますが、地域住民からの意見を踏まえて「学校を存続させる」という選択肢や可能性はどのように検討されるのでしょうか。住民意見が実際の計画にどのように反映されるのか、お聞かせください。
事務局	最初の説明会等におきましては、説明の進め方や姿勢に関して配慮が不足し、住民の皆様に不安や不信感を与えてしまいましたことを深く反省しております。本来であれば、事前に皆様と対話を重ね、ご意見を反映させながら計画案を練り上げるべきであったと受け止めております。本日の意見交換会は、提示した案をそのまま押し通すための場では決してございません。スケジュール案や統合の組み合わせを含め、各地域でいただいた率直なご意見やご懸念はすべて真摯に受け止め、検討協議会に持ち帰って再度丁寧に見直し・検討を行ってまいります。
参加者	先ほど宇目地域のお話でもありましたが、子育て環境や生活の利便性などを理由に転居する家庭があり、過疎化が進むことが予測されます。行政としては移住定住の促進や観光振興など、地域に人を呼び込んで地域を活性化させようと取り組んでいる一方で、今回の学校再編案はその方向性と真反対に向かっているように感じられます。学校施設の維持管理費は市費負担ですが、教員の給与等の人件費は国・県が負担していると伺いました。それであれば、他の施策予算も含めて財源の使い方を見直し、地域に学校を残す方向へ投資することはできないのでしょうか。地域で子どもを育てることが地域の活力となり、将来的に子どもたちが戻ってくるという長期的な視点に立てば、小規模であっても学校を守り頑張っている地域こそ魅力的に映るはずです。本匠だけが残ればよいという問題ではなく、観光・移住定住施策と教育行政が横の連携を図り、地域全体のバランスを考慮した持続可能なあり方を検討していただきたいです。
参加者	本匠の小規模特認校の取組について申し上げます。本校が小規模特認校として指定された背景には、地域住民や学校関係者の並々ならぬ努力と長年にわたる連携の積み重ねがあったという事実を、ぜひ多くの方に知っていただきたいです。本匠では、教育コーディネーターや学校運営協議会、地域のボランティア団体の皆様が一体となり、惜しみなく学校支援に携わってこられました。子どもたちも茶育活動に始まり、俳句活動など、総合的な学習の時間などを通じて地域の方々と深く交流し、大きな教育的成果を上げてきた実績が評価され、昨年度のモデル校指定を経て、今年度より小規模特認校として

	スタートいたしました。地域の方と学校が一軒一軒、住民との対話を重ね、築き上げてきた強固な地域コミュニティの支えがあってこそ成り立っている学校運営であり、地域の誇りであると感じております。現在では区域外からも多くの子どもたちが通学し、生き生きと学んでいます。一方で、大人数の集団に適応が難しく支援を必要とするお子さんも通学されているため、教職員の適正配置や支援体制づくり、予算面での支援は今後も継続していただく必要があります。他地域において「小規模特認校に指定されれば安易に学校を残せる」といった誤解が生じないよう、地域がどのように学校を支援し受け入れる体制を作ってきたのかという本質的な部分も含めて、各地区で丁寧に説明していただきたいです。
参加者	提示された令和 12 年度の児童・生徒数の推計を見ましても、率直に申し上げて「現行のまま学校を存続させても良いのではないか」と感じます。過去に近隣校が閉校した際も、地元に学校があっても保護者の判断で他校を選択し、自然に児童数が減少していった経緯を見てまいりました。家庭がそれぞれの判断で学校を選び、その結果として自然に減少していくのであれば納得できますが、行政主導で一斉に統廃合を進めて学校を急激に集約することには違和感を覚えます。離島や過疎地域のように、少人数の子どもを地域全体で見守り育てる教育のあり方もあります。これだけの児童・生徒数がいるのであれば、各地域に学校が存在し続けること自体が地域の活力や潤いにつながるのではないでしょうか。学校の再編については、保護者や子どもたちの選択と意思をもっと尊重すべきだと思います。